

第4回中之島映像劇場 限定と豊穣 ——マイケル・スノウの実験映像——



《波長》(16mm/45分/1967年)



《中央地帯》(16mm/180分/1971年)

【日時】 2012年10月27日(土)、28日(日)両日とも

①11:00からAプログラム《波長》(16mm/45分/1967年)

②13:00からBプログラム《中央地帯》(16mm/180分/1971年)

※両日ともBプログラムの冒頭に15分の解説あり

【会場】 国立国際美術館 B1階講堂

入場無料／全席自由／先着130名(10:00より当日の各プログラムの整理券を配布／1名様につき1枚)

各プログラム入れ替え制となります

【限定と豊穣】

映像とは何でしょうか？そして、映像を体験するとは？

「中之島映像劇場」の第4回では、これらの問いかけに対しての究極的な答えの1つと考えられる、カナダの作家、マイケル・スノウの作品を通して、映像やその体験の意味を明らかにしたいと考えます。

1960年代後半から70年代にかけて制作された一連の重要な映像作品があります。それらは、アメリカの批評家、P・A・シトニーが「構造映画」と呼んだもの、つまり、「一貫してその形式を追求し、内容は最小限にとどまり、その外観は二次的」なものに、大きく重なり合うものです。それらの作品群は、直接答える意図があったかどうかは別にして、上記の問いかけに対して、問題点をしぼった形で回答を導き出そうとしていたと評価出来ます。

現在の眼から見れば、シトニーの規定した作品群はフォーマリズム的映像と考えて良いでしょうが、それだけでなく、同時期の概念芸術やミニマル・アートと共有する志向性を持っていたとも理解されます。事情が複雑なのですが、フォーマリズムであり、また、それへの反抗でもあったわけです。シトニーは内容の最小限さに着目しましたが、換言すれば作品の主題やコンセプト、あるいは技

法の限定となります(したがって、繰り返しが頻出する、などの結果をもたらします)。

注目すべきなのは、こうした縮減や限定の結果、作品が貧しくなるのではなく、(シトニーが「外観が二次的」としたのにもかかわらず)むしろ逆に作品が研ぎすまされ、深まり、豊かさが生じているという点です。

今回上映するマイケル・スノウの 2 作品の場合、カメラの位置や運動の基軸が限定され、さらに、写されるもの(被写体)もわずかなものに絞られています(部屋の中や山岳地帯)。しかし、私たちはこれらの映像を堪能します。それは単なる視覚に留まらず、「全身全霊」で「見る」体験であり、そこで得られるものこそ運動と時間の豊穡なのです。

普段は見るのがなかなかできない実験的な作品から、映像やその体験の意味をつかんでいたくとともに、「美術と映像」の問題にも眼を向けていただきたいと思います。

#### 【マイケル・スノウ(Michael Snow)】



マイケル・スノウ

1929 年、トロント生まれ。カナダを代表する作家で、現在も旺盛に美術、映像、音楽などの多様な分野で活躍しています。ニューヨーク在住時代の初期の仕事は「歩く女」シリーズに代表されるように、むしろポップ・アートの的でしたが、1 つのモチーフやテーマを平面だけでなく、彫刻やインスタレーションなどに展開するという取り組みが独自でした。1960 年代から多数の映像作品を発表し、それらのどれもが問題作となりました。他にも写真やホログラフィを手掛け、また、現代音楽やフリー・ジャズ分野では、バンドでの演奏やレコードの出版も行っています。日本では映像作品の散発的上映やコンサートがありました。本格的な個展は 1988 年(原美術館)がこれまでのところ唯一です。1993 年、カナダではスノウの仕事が多面的に辿る、「ザ・マイケル・スノウ・プロジェクト」が実施され、多くの展覧会が開催され、4 冊のカタログ／著作集にまとめられました。

#### 【上映作品】

A プログラム:《波長》(Wavelength/16mm/45 分/1967 年)

この作品では、位置を固定されたカメラの淡々としたズーム・インが続いていきます。その間、いくつかの「出来事」が生じます: 人物の侵入といった被写体側の「ドラマ」とともに、作家のスノウがフィルターや編集時に介入する映像上の変化です。これらの出来事は、一般の映画における「物語」と等価なものになりますが、極めて散発的にしか発現しません。

Bプログラム:《中央地帯》(La région centrale／16mm／180分／1971年)

山岳地帯に設置された特殊なカメラ台を用いたこの作品では、カメラの位置は変わらず、しかし、レンズの向かう先は 360 度自在になっています。単純な回転に始まり、徐々に複雑になる動きはやがていわばジェット・コースターに乗っているかようになります(他には太陽の運行しか動くものはありません)。視覚だけでなく、身体にも大きく作用する、映像に独自の時空間が生み出されています。

#### 【中之島映像劇場】

国立国際美術館では 1989 年から映像作品の収集に取り組み、常設展示場で公開していました。近年、中之島に移転してからは定期的な上映会の形を取っています。さらに 2008 年には「Still/Motion 液晶絵画」展を開催し、絵画と映像とが交錯し合う現代の美術表現に光を当てました。さらなる展開を図ろうと、昨年、2011 年の 3 月から「中之島映像劇場」と名付けました。メディアに立脚した、言葉の最も広い意味での「美術と映像」の歴史的な変遷を探り、現代の状況の解明を試み、さらには今後の動向をも予示出来ればと願っています。

All images are courtesy of the artist and Canadian Filmmakers Distribution Centre.